

「教育社会学の観点から」

竹 内 洋（京都大学教育学部教授）

ご紹介いただきました竹内でございます。3人の先生のコメントというのはなかなかおそれ多くてできませんので、補足をします。最初の市川先生のお話は、私知らないことがたくさん多くて、ずいぶん勉強になりました。さっきから話題になっている総合的な名称の大学が、実質的に一般教育化していきだろうというのは、そうではないかと思います。もちろん現状では専門の集まりだから、実際の教育の中身はそうになってないんだけど、少なくともそういう学部は社会の側からは、非常に一般教育的な感じで受け取られているんじゃないかと思うんです。今からだいぶ前ですけど、阪大の人間科学部、これも四文字学部ですが、それと私のいる京大の教育学部の学生の就職で、どちらが巨大企業に就職している割合が高いだろうかと調べたんです。そうしたら四文字が強いというのが、わかりました。阪大人間科学部の方が大企業就職率は高い。データは出たんですけど発表はしませんでした。

最近の京大も文系は、就職が一番いい学部は、もちろん法経らしいんですが、その次は総人だというんですね。3、4がなくて5が文と教だと。偏差値は今のところは総人よりは文教の方が高のに、これは良くないんじゃないかと思っているんですが、たぶん日本の企業から見たら、文学部とか教育学部というのは専門特化しているような、ポリシーがあるような、本当にそうかどうか疑問ではありますが、そういう学生を生み出しているんじゃないかということで、かえって総合とか付いた学部の方が企業人にはいい、というのがあるんじゃないかと思う訳でございます。

それに関係して市川先生のいう狭い意味での教養についてですが、結論から言うと、どうも今日もそうですが、教養教育、教養って言った時に漢字の教養でずっと考えていると、どうしても我々は旧制高校的な教養主義から抜け出せなくなるんじゃないかというふうに私は思います。ある意味では旧制高校の教養主義というのは、成功したんだと思いますが、それは今日そのまま持ってくるのはアナクロニズムですが、なぜ成功したかということ、さっきから話題になっている三好先生が、日常的ドクサからの解放とかいう言葉を仰りましたけども、そういうことが旧制高校には、装置として存在していたということが重要だと思うのです。だから教養教育というのは単に先生が何を教えるとか、学生が何をやるのかという事ではなくて、あの旧制高校というのは、大きなイニシエーションの場で、今までの自分を解体するするという全寮制でありますから、教養教育というのはカリキュラムの問題だけじゃなくて、もっと広い装置の問題としてあった。だから旧制高校の教養主義というのが良くも悪しくも成功したと、だからそういう広い意味での教養の装置というものを、考えなければならないということだと思ふんです。

しかし旧制高校的な教養主義は、もちろん今日の学生にとっては、リアリティのないものだと思います。授業で旧制高校の生活も多少紹介しました。『三太郎の日記』とか『善の研究』とかを読んで、旧制高校生が人格形成したとか、人生を考えたところ、ところが、いまの学生にとって人格形成や人生を考えることが、どうして読書だけに特化するのかというのが、わからないことなんです。今の学生も、やっぱり社会を生きていくには、生きる術というか、そういうものが必要だと、そういうことは考えている訳なんです、それが読書に特化するっていうことは、ほとんどリアリティがない。だからサークルやアルバイト、付き合い、映画のビデオというところから考えているんじゃないか。だから今の学生も一種の教養主義はあるんじゃないかと、あるけどそれは漢字の教養ではなくて、カタカナの「キョウヨウ」みたいなものではないかというのが私の考えなんです。そういう意味では、もう今の時代に、旧制高校的な漱石に出てくる広田先生のような感じの人生の教師が、読書を中心として学生を導くというのは、かなりのズレがでてはきていると思うのです。

そもそも、旧制高校的な教養主義を伝えられるようなそういう大学教師は、もう今やほとんど私を含めていない。スペシャリストとして我々は大学教師になっているわけですから、人生の教師みたいになれる資格はほとんどないわけですね。だから教養教育が必要なのは、学生じゃなくて今の大学教師じゃないかと私は思うぐらいであります。

そうしたらその学生のカタカナの「キョウヨウ」でいいかということになるんですが、私がとりあえず考えているのは、これからの教養教育がひらがなの「きょうよう」になったらいいんじゃないかということなんです。ひらが

なの「きょうよう」であるというのはどういうことかという、かつては教養の師は、万卷の書物を背景にした人達だったけれども、これからのひらがなの「きょうよう」の師というのは、むしろ社会でいろんなところで、なにごとかをなしたような人、それが政治家でもいいし、経営者でもいいし、芸術家でもいいんですが、むしろそういう人にやってもらったらいいんじゃないか。フランスの社会学者のブルデューもいっていますが、大学はいつも教師は善であって、悪は学生から来るという思考法になっていますが、いつも学生の方に問題ありとして、あまり自分たち教師のことを反省しない。だから社会人入学というのは大変結構だと思うんだけど、教授も一部は社会人教授にしたらどうかと思うのです。とくに「きょうよう」教育のための教授として期待すべきである。経営者とか政治家とかそういう人たちが自分で得たもの、いわゆる知識、ナレッジ（Knowledge）じゃなくて、もうちょっと人生の知恵みたいなもの、ウィズダム（wisdom）、そういうものを伝達するようになったらいいんじゃないか。副産物もある。教育者になるとあまり悪いことができませんよね。だから日本の政治家を、このひらがなの「きょうよう」の師にすれば、そんなに悪いことはできない。そういう効用もあるんじゃないかと思うわけです。

そういう意味では、森先生のいわれた名誉教授が、ボランティアで全学共通科目やってもらっているというのは、非常にアイディアだと思います。ただその時、質問しそびれたんだけど、ボランティアでやりたいという名誉教授が、すべてがいいという場合もないわけであって、そういう場合断ることはできるのだろうか。そういう場合はどうするのかを教えてくださいと思います。

とりあえずこのぐらいで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。